

山田顕義の「人間の条件」

日本大学の建学の精神のかたちと変遷をたずねて——学祖と建学の精神に関する研修を通じて感じ考えたこと——

勢力 尚雅

せいりき・のふまさ／日本大学教授

勢力——日本大学理工学部 of 勢力と申します。

今回お話をするにあたって、どのようなタイトルにしようか、とても悩みました。というのも、日本大学には広報部に大学史編纂課という組織があつて、そこには学祖研究、あるいは学祖にかぎらず日本大学の歴史を専門に研究されている先生方が所属していらつしやいます。しかし私はその部署の人間ではありません。日本大学理工学部の一教員で、専門は倫理学あるいは西洋の思想史でございます。そういう人間がなぜ学祖研究のシンポジウムに来ているのかと申しますと、日本大学全体で、学

祖の理念をもう一度きちんと明らかにして、目指す方向を統一しようという取り組みがありまして、各学部から教員を出して研修を行つているんですね。私は昨年度その研修に行きまして、その中で自分でも面白く感じたところがいくつかござ

いましたので、本日はそのようなことをお話しできればと思います。ですから私の話は、日本大学の学祖に対する共通認識と





- 本学の頭文字「N」を力強さと躍動感ある書体で表現しており、
- 右横の丸印は**建学の精神**である「**日本精神**」「**個の尊重**」さらに**輝く太陽**を意識しています。ロゴを「エヌ・ドット」と呼びます。
- 本学は新教育理念「**自主創造**」の**気風に満ちた人材育成**を目指します。
- キャッチフレーズは「**あなたとともに 100 万人の仲間とともに**」

<http://www.law.nihon-u.ac.jp/faculty/symbol.html> より

いうことではない、という点だけ、お断りしてからお話ししたいと思います。

今日のお話のタイトルは、「山田顕義の「人間の条件」」としております。「人間の条件」という大きなタイトルですが、この後お話ししていきますように、人間は普通に生きていても万物の最たるものにはなれないという山田の考えが、ちよつと面白いなと思ひまして、こういう題にいたしました。山田顕義はそれほど多くの言葉を残していないのですが、下田歌子のようにこれからまだまだ発掘されるのかもしれませんが。

あらためて、なぜ教員として研修に派遣されることになったかを申しますと、学祖の建学の精神というものを学生に話すという

機会があつて、日本大学でも「自主創造」という理念を一年生に教えるという取り組みを先行実施している学部がありまして、これからは他の学部でもそれを行っていくという動きになっているんですね。そのために自校史教育ができる人間を育成するという目的の研修なわけです。

私自身、建学の精神といったことに、もともと関心がありました。というのは日本大学のこのロゴマークですが、日本人というのは、先ほどの下田歌子の歌についてのお話にもあつたように、言葉をいろいろな角度から見るところがあつて、哲学的な言葉を縷々^{るる}尽くすよりも、シンボルとかアレゴリーとか、そういうものの方があつて、心に残るところがあるように思ひます。そういうこともあつてか、日本大学には芸術学部がありますが、この先生がこういうものを作つてくださったんですね。このロゴを見て、みなさんはどのようにお考えになりましたでしょうか。私は最初、この右下についている丸を、ピリオドだと思つたんです。すごく弾んでいるけれどピリオドというのがいいね、という話を周りの人としていました。ちよつと立ち止まって考えるところがある、と。ただ「自主創造」については、結局は自己流で亜流では駄目なんじゃないかという思いがあつたりして、それでいいのかな、という思いを持ちました。そこでさらに大学のホームページを見て、右下の丸が、建学の精神である日本精神と個の尊

重さらに輝く太陽だとはじめて知りました。さらに「自主創造」の気風にみちた人材の育成を目指す」という目標と、キャッチフレーズ「あなたとともに100万人の仲間とともに」があわせて書いてあったわけです。

その研修に参加するモチベーションとして、「自主創造」の気風」というのは、たしかに、最近のコピペとかバクリというような要領の良さとは違うという意味で、好感が持てました。世の中には効率主義や成果主義のようなものが蔓延しています。そうだとすると、「自主創造」の気風」を個人や組織で養うというのは、とても重い任務だと感じました。それと、「日本精神」と「個の尊重」とが並んで掲げられています。日本としての集団を意識した「日本精神」と「個の尊重」をどうやって両立するのかという疑問も持ちました。さらに建学の精神に、学祖の考えはどのように影響しているのかということも気になりました。さらに、「躍動感」「輝く太陽」ということについては、たしかに日本人はそういう勢いを称揚して水に流していくような前向きな明るさがあるけれど、反面、ちよつと立ち止まって反省的観照をするという側面もあるはずだけれど、そつちには言及しなくていいのか、と。あるいは、「あなたとともに」の「ともに」というのが、哲学的観点からすると、ちよつと悩ましいんですね。たとえば、教員が学生たちと「ともに」いるということは、どうということなのか。

私の尊敬する哲学の先生はよく、「先生が一方的に話して、気持ちよくなる授業をしてはいけない」と言うんですが、そういうことも含めて、この「ともに」って何なのだろうと、関心を持っていました。

もう一つは、私は山田顕義にもともと関心がございました、写真を見るとなかなかハンサムな人だなと思っていました。理工学部はクラス担任制をとってしまって、一年生が入学するとすぐに『山田顕義の生涯』という本を配って、大学史編纂課の先生がいらして講演をされます。講演が終わった後に、この本を見ながらレポートを書くという結構な荒行を課すんですね。毎年それを通読すると、この人は若い頃は洋式兵学の達人で、負け知らずです。三十歳ちよつと前にヨーロッパを見てきて建白書も書いていて、しかしその後はすつぱりと法律の方に移って、死ぬ直前までに日本の法制をほぼ作り上げている。なおかつ教育も推進した人で、四十八歳になつてすぐの頃に亡くなっているんですね。自分もそういう歳に近づいてきて、こんな短い人生にこれだけのことをなし遂げられる人がいるのかと、もともとそういう関心がございました。

あらためて山田の経歴を確認いたしますと、一八四四年生まれということで、下田先生より十歳上になります。萩の藩士で、伯父には吉田松陰に兵学を教え洋学にも明るい山田亦介、親戚筋に

は村田清風がいますから、学者の家系と言えるでしょう。山田は、松陰の松下村塾に十二歳のときに入塾します。二十歳で高杉晋作とともに脱藩し、二十代前半は、戊辰戦争で大村益次郎から洋式兵学を学んでいます。そういう激動の時代を渡り歩いた人ですから、激動の時代に生まれて生きた多くの先輩からたくさん影響を受け、想定外のことにの中にいかにブレイクスルーを見つけ出すかを学んだと思います。

吉田松陰から山田顕義に与えられた扇には、——山田はこれをよく見ていたそうですが——「人とは異なる高い志を立てよ」と



松陰が山田顕義に与えた扇面

立志は特異を尚ぶ
俗流ともに議し難し
身後の業を思はず
且く目前の安を憚む
百年は一瞬のみ
君子は素餐する勿れ
与山田生
回子（松陰）

人とは異なる高い志を立てよ。
俗流（高禄に執着する者）は共に論ずるに足らない。
彼らは自己一身のことのみを考え、
自分の死後も引き継がれるべき仕事は考えず、目先の安楽のみを追い求めている。
100年という年月も実は悠久の歴史から見ればほんの一瞬にすぎない。
君子たるもの素餐（功労がないのに高位高官につく）してはならない。

いう「立志は特異を尚ぶ」とあります。これが「自主創造」という日本大学の理念に受け継がれるわけです。この詩の後半を見ると、「俗流（高禄に執着する者）は共に論ずるに足らない。彼らは自己一身のことのみを考え、自分の死後も引き継がれるべき仕事は考えず、目先の安楽のみを追い求めている。百年という年月も実は悠久の歴史から見ればほんの一瞬にすぎない。君子たるもの素餐（功労がないのに高位高官につくようなことを）してはならない」と、励ましでもあり、戒めでもあるような言葉で、自分の死後にも受け継がれるような仕事を高い志として掲げなさい、と言っているわけです。ここにはその目的語もなければ、やり方も書かれていないわけですが、しかしこの扇には「自主創造」ということのエッセンスが全部つまっているようにも思います。

山田顕義は二十代で明治新政府に入り、兵部省の理事官として、岩倉使節団に随行しております。しかし彼はアメリカは早々に引き上げて、ヨーロッパを中心に見たようです。それには、新興国プロイセンが大国フランスに勝つてしまうという普仏戦争に対する興味というものがあつたと思われます。帰国してすぐにこれに関する報告書を提出していますが、その最後の方に、「遠く将来に目的し基を建て漸次に之を培養せざんばあるべからず」と言うのですが、つまり先ほどの松陰の考え方同様、目先の

ことばかり見てはだめなのだ、遠い将来を見据えてしつかりや
りなさいと、そういうことを二十九歳くらいのときに言ってい
ます。

それで今日お話ししたいのは、このときの建白書についてで
す。これが私にはとても面白かったです。ちよつと読みます
と、「人を以て万物に最たる。曰く性霊。性霊の体なる何ぞや
曰く権衡曰く慣習曰く精神なり。其用たる何ぞや。曰く治術曰
く行儀曰く実義なり。……苟も治術なく行儀なく実義なく其れ
何を以て人たるを得んや。権衡なく慣習なく精神なく其れ何を
以て政府たるを得んや。かくの如きは野蛮の国にして決して開
化文明の国に非ざるなり。また天地生成の意にあらざるなり」と
昔の人はやはり非常に漢籍をよく読んでいたのだなあと。非常
にリズムカルだし、ロジカルだし、かき立てられるような言葉で
簡潔に、人間が万物の最たるものたりうる条件を述べているなど
感じました。それでその条件というのが、「権衡」と「慣習」と「精
神」であり、そういったものを「治術」「行儀」「実義」に用いる
ところであると言うわけです。

これには実は背景がありまして、彼が洋行している間に山縣有
朋が徴兵制の実施を急いでおりまして、そのことを戒める意味も
こめた建白でございます。つまり、「権衡」「慣習」「精神」、そし
て「治術」「行儀」「実義」をせずに、「千年の国典の改革」をし

「建白書」（1873）にみる山田の国民観・国家観

法と律とは決して人の適意なるものならず。常に人意を抑制するものにして人間不便の具
なり。故に人その抑制不便の苦を脱せんと欲する素よりその自然なり。人びとよくその法律
の国家に存在する所以を識得せば、すなわち至公至正の理を知るなり。…兵はその国体と法
律によりその権衡を適宜にし設置すべきものなり。しからばすなわち、我が国体と法律を知
り、各国古今の兵政を斟酌し、その利害損益を比較し、我が国人民上においてその利益ある
所以を知り、然る後に設置せずんばあるべからず。…徴兵の制また各国自ずからその法を異
にす。…人民よくその理を了解してしかる後以て徴集すべし。…人民一般の知識敵兵に超越
するを以て最要とす。…これ人民をして各自文武の道決して偏なるべからざるを知らしめ、
この土に生ずる者は相共にこの国権を保護し、而してまた各自所有の権を固守し、決して他
人をして侵奪せしむべからざるの理を講究するなり。故に強兵の基は採録運動するにあらず。
国民一般都鄙の別なく郷校の教育を充分にし普く人民の知識をして甲乙なからしむるにあり。
…これかれ互いに相権衡し、人民をして都鄙の別なく歎苦を一樣にし、人世苟も欠くべから
ざるものは文武の道なる所以を知らしむべし。かくのごとき措置決して速成を主とすべから
ず。遠く将来に目的し基を建て漸次にこれを培養せずんばあるべからず。…

（ひらがなを用いて書き下し、太字と下線を用いて一部抜粋したのは引用者による）

たり「古来慣習の礼節廃止」をしたりと、「事物道理の当否を知らず」に物事を進めるのは、「猿猴の療創」、つまり、伝説の生き物の怪我を治すようなものののだ、と。そんなことをしていると「天然の治療を害する」のだ、人間の世の中というものには、やはり人間の天然に合った治療をしなければならない、と言うわけです。では人間の天然に合った、人間を万物の最たるものにするのは何か。それが「権衡」「慣習」「精神」であり、それを「治術」「行儀」「実義」に用いることである、と言います。

私が参加しました研修は、学生向けの自校史の説明を主眼としておりましたので、学祖の言葉の細かい解釈までは立ち入らないというものでしたが、私はそこでもらったこの資料が非常に気に入りました。そして、この「権衡」と「慣習」と「精神」とはどういう能力なのだろう、さらにその主語は何なのだろうという疑問を持ちました。政府が「権衡」して一般の人を治めて行くのか、あるいは一人一人の国民に「権衡」を求めているのか。国家と人民との関係を考える上でも、非常に面白い言い方だなと思いました。その後、山田顕義は徴兵制に関しては、山縣を押しとどめるところまではできず、その翌年から、兵制改革ではなく司法改革の方をしていくということで、三十歳から死ぬ直前まで、司法改革に取り組みました。この間にいろいろなものを作るのですが、非常に山田顕義らしいなと思ったのは、法制を理解させるために時

間を与えようとするんですね。法制をただ一方的に押しつけるのではなくて、法制をめぐる「権衡」と「慣習」と「精神」の働きが一般人民の側にも生じる時間をとろうとしたのではないかと思われるわけです。結局は、それが仇をなしてしまつて、彼が作った民法と商法の施行が延期されてしまう法典論争というものもありました。しかし、これにしても「天然の治療」を重んじた山田らしいことなんじゃないかと思えます。

そして山田は教育者としての仕事も、法典編纂と並行して進めていきます。司法大臣のまま、皇典講究所の所長にも就いて、その就任演説で、「国の内外、世の古今、人種の異同を問わず、いづれの国のことでも、いづれの人のことでも、余さず漏さず、力の及ぶだけ講究しなければなりません。これには我國の必要なるところの国体を本として、之によつて取捨折衷をして参らねばなりません。……今日になると日々に国典の講究は薄くなり、歴代のことも本源に遡つて探究することが薄くなり、斯くの如き傾向で参りますと、一身一家のことから、政事なり法律なり、何事も我が国の本は忘れて……余所の国の法度文物を飾り、其れを以て我が国の政事法律及び一家の事を議するところの具となるやうになつて参りましたは、決して我が国の風土人情に適するところの政事も出来ず、法律も出来ず、また一家を治めることも、出来るものでは有りますまいと考へます」と述べています。

ここに「国体」という言葉が出てきていまして、これがどのくらい国家神道的なものと与するものなのか、あるいはそこから距離を取ったのかということ自体、非常に大きな研究トピックになると思います。ここでは置いておきます。ここで山田が述べていることは今の私たち自身の問題でもあると思うのですが、西洋のものを右から左に持つてきても、なかなか私たちの風俗・文化や人情のなかに根付いていかない。特に彼は、外国の法典をどう訳すのか、どのように日本に根付かせるのか、それをどのように運用するのか、人材を育てるのかといったことをやっていく際には、やはり日本人の「数千年の習慣風俗」といったものを観察する必要がある、と述べます。そしてそのためには「国書」——これは他のところで「我が国の古典」といつて限定しておりますが——、これを研究するしかないだろう、と。そういうことによつて、「人情ノ基ク処、風俗ノ由ル処ヲ説明シ、国民ヲシテ国家に忠愛ナル徳義ヲ深厚ナラシメン事ヲ希ヒ」、つまり大事も、「国文・国史・国法」を一体で研究しなければならぬと言ふわけです。狭い専門を作つても、それでは私たちの風俗・文化や人情に適するようなものにはならないのだから、総合的に日本の人民の暮らしにとつて良いものを創るということをめざさうというのです。

そういう山田が、ドイツ歴史法学派という、その当時流行つた

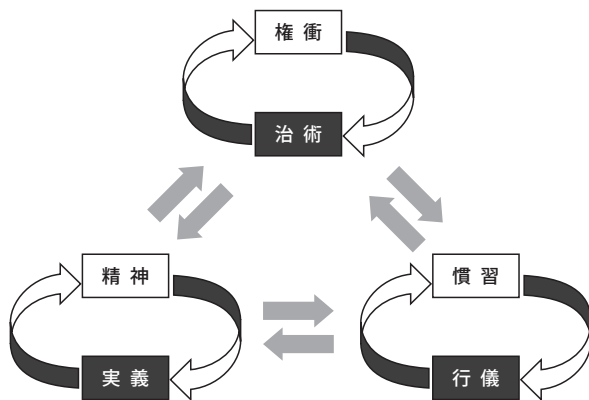
学派と出会います。歴史法学派は、山田が当初学んでいたフランスのポアソナードの自然法的発想——普遍的な人間の理性が普遍的な法を生むという発想——とは一線を画するものです。歴史法学派によれば、法は、言語同様、民族精神の発露とされます。多様な言語の多様ななりたちを研究するときと同様、法のかたちについても歴史的な研究をしていかなければならないというこの歴史法学派の考えと、先ほどのような国典研究が必要だという山田の考えが共鳴して生まれたのが、日本大学の前身の日本法律学校でございます。

彼が開校式で演説した内容も、建白書と非常に似たもので、「法律の天然に基き人為の之を補ふ……自然のものは決して人為を以て廃絶することは出来ず又慣習は自然進化に依るに非ざれば変更の出来ぬことは古来の歴史を逐つて見れば決して間違ひも無い所の事実であります。然れば其事実と理由とを講明し……」というものです。

ここに「慣習は自然進化」という言葉があります。慣習はただひたすらに固守するものではなく、自然に進化していかなければならない。ただしそれがおのずと変化するのを待つていていいものではなく、人為によつてそれを補いながら進めなければならぬんだ、と。これはやはり、先ほどの「天然の治療」という言葉とも絡むような、彼の一貫した立場であると思います。すると翻つ

でもう一度「権衡」「慣習」「精神」とは何なのかを考えてみたくなるわけです。

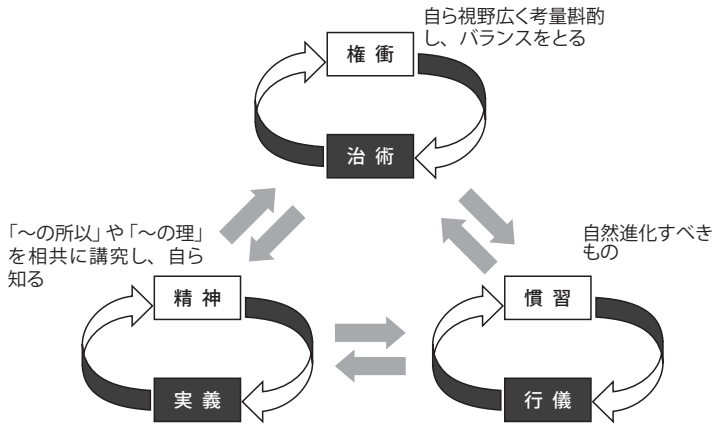
ここからは仮説になりますが、山田は自然というものの方に、「権衡」「慣習」「精神」を置いていたように思われます。たとえば「権衡」の外化であり、かつ「権衡」を規定する人として、政治、法律、あるいは兵制といった「治術」が置かれ、自然のものと人



為的なものを組み合わせながら相互作用させていく。「慣習」と「行儀」も相互作用し、「行儀」という生活様式全般にしたがって「慣習」も変わる。「精神」も「実義」と相互作用し、しかもこの三つが互いに影響し合いながら変わっていく。そういうことを考えていたのではないかと思われます。

そういう仮説をもとに建白書に戻ってみますと、面白い表現がいくつかございます。先ほどの法典論争のときも、人々に法律を押しつけるのではなく、その理をきちんと理解させ納得させるということがありましたが、ここでも人々に「法律の国家に存在する所以を識得せば」とか、「我が国体と法律を知り、各国古今の兵政を斟酌し、その利害損益を比較し、我が国民あげてその利益ある所以を知り」とか、あるいは「人民よくその理を了解してしかる後」といった表現です。つまり、押しつけるのではなく、その理をきちんと納得させることが強調されています。たとえば兵制改革についても、「人民一般の知識敵兵に超越するを以て最要とす」と。与えられた知識でなく、自分で考えた知識、徹底的にその理を納得した上で得たものの見方を人民が持つて初めて、兵というのは強くなるのだと、そう言うわけです。

だとすると、「精神」というのは「くの所以」や「くの理」を相共に講究し、みずから知ることなのではないか。もちろんある程度は教えられるものがあるだろうけれども、けっして鵜呑みにさ



国民（臣民）においても国家においても、各部連関の自然進化こそ **天然の治療**

ただし、自然進化のためには、人間の歴史に学び、諸外国の試みや碩学の知恵に学び、自分たちに適するものの選択を試行錯誤し続けなければならない。

せるのではなく、自分でその所以や理を知る。そして「権衡」というのも、みずから視野広く考量斟酌し、バランスをとることで、「慣習」というのも、それを通じて自然進化していくものだと考えられるのではないか。そうだとすると、国民（臣民）においても国家においても、各部連関の自然進化によってこそ「天然の治療」ができるのであると言える。しかし、その自然進化のためには、ただひたすらそれが起こるのを待つのではなく、人間の歴史に学び、諸外国の試みや碩学の知恵に学び、自分たちに適するものの選択を試行錯誤し続けるべきである。そういったことが山田の考えていた、人間が「万物に最たる」となるための条件なのではないかと私は解釈しまして、非常に面白いなと思いました。

山田と同じような自然と人為の相互作用ということを十八世紀から二十世紀初頭にかけて議論していたのが、私が専門としているイギリス経験論です。イギリス経験論は、人間には自然な性向（傾向性）というものがあり、それを人為的なものによって補助とされるけれども、逆に人為的なものが自然な性向の働きを阻害してしまう側面もあるから、両者のバランスをどのように取っていくべきかということを主に考える学問です。ヒューム、アダム・スミス、ベンサム、J・S・ミルなどが代表的人物として挙げられますが、今日はこの議論は割愛します。

学祖のことを紹介している以上、その終焉をお話ししないわけ

にはいきません。山田顕義は司法大臣をしているときに大津事件が起きて引責辞任し、その後郷里に戻りますが、生野銀山を視察中に転落死しました。

日本大学ではその学祖の精神を建学の精神として、現在もさまざまな受け継いでいます。専門学校令下の日本大学を経て、戦後新制日本大学となり、そこで決められた「日本大学の目的および使命」の三行目には「自主創造」の語が出てきます。「日本大学は 日本精神にもとづき道統をたつとび 憲章にしたがい自主創造の気風をやしない」と。では、ここに挙げられた「日本精神」と「道統」というのはもうなくていいんでしょうかということが、気になるわけです。ホームページには、「知的好奇心をもつて自らが課題に取り組み、新しい道を切り開いていくこと」としか書かれていないけれども、最初の二行はいいのか。研修でいただいた資料には、一九五九年、この文書を改正をした当時の人たちが侃侃諤諤の議論をした資料もいただきました。

その改正起草委員会の説明を見ますと、「日本精神」は、この国の風土・習俗・人情のかたちで、そういったものを文書や歴史から講究することによって浮かび上がってくるものであり、「道統」とは、拙速な人為とは異なる「天然の治療」、「自然進化」の道であり、「自主創造」とは、「精神」「権衡」「慣習」の相互作用を他者と共に実践し知を得る技を修練していくことになろうかと思えます。

本日のまとめになりますが、学祖の建白書や開校式の言葉を参考にして、「自主創造」を私なりに次のように理解したわけです。

① 人為（言葉や制度）は、私たちの精神、権衡、慣習に影響を及ぼす。それが適切な影響であるかどうか、歴史や文物、他文明の取り組みや、碩学の論説などを通じて、たえず反省的に講究、斟酌し、自然進化をめざすこと。

② とりわけ、標語やスローガンについては、その内実を講究し続けること。他者とともに講究する場合でも、講究は自ら実践し、さまざまな所以や理について、自分でその知識をつくること。そして、そのための「わざ」を磨くこと。専門家の「治術」（「猿猴の療創」かもしれない）に一任しないこと。

③ 自分が講究、権衡した理については、それを他者に知らしめる努力と時間を惜しまないこと。他者とともに、目の利益に囚われず遠く将来の目的に向けた基礎を建て、時間をかけて、「天然の治療」を探すこと。

学祖の言葉をふまえて、私が腑に落ちる「自主創造」の理解というものを得られたこと、そして「自主創造」というものを、鵜呑みにさせるのではないかたちで学生に伝えることの大切さを考えられたことが、私が参加した研修の成果であるかなと思います。本日はその成果の一端をこの場でお話しさせていただきました。どうもありがとうございます。

伊藤—— 勢力先生ありがとうございました。

それでは最後に日本女子大学名誉教授、片桐芳雄先生にお話しいただきます。片桐先生は日本女子大学人間科学部の学部長を務めになられ、教育史の専門家としても学祖成瀬仁蔵を見ていらつしやいましたが、さらにご退職後に「成瀬仁蔵とその時代研

究会」を日本女子大学を中心に立ち上げられました。この会の名称が、成瀬仁蔵のみならず、その時代をも研究対象にしているところに、先生のお考えや成瀬仁蔵に対する向き合い方というものが伺えるように思いますが、本日は、先生のさまざまなご経験からのお話を伺えればと思っております。片桐先生よろしくお願いたします。